



中高生とともに差別と闘う

「応答」すること

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



「親と子で人権を考えるつどい」

人権ことも塾、秋の3大イベントのラスト。タイトルだけ見ると、これまでのイベントとどこが違うの？となるかもしれません。同じように読み取れます。決定的な違いは、この会が小中PTA連合会の主催だということです。つまり参加者は原則、小中学生とその保護者、だということです。

同会では例年、様々なジャンルの著名人呼び、各校に動員をかけた、講演会形式のイベントを開催していたそうです。しかし、その形態が本当に参加者の人権感覚と向き合い、差別意識を洗うものとなっているのか。「聴いて終わり」だけで、本当に差別はなくせるのか。そんな素朴で純粋な疑問を持たれていた方が役員さんのなかにおいでで、そんな方々が、PTAの会合でシンジ (Vol.332-339) と出会ったわけです。

シンジが思いを込めて語る、自身が学んできた部落問題学習、全体学習。体験してきた差別事件。我が友や両親、故郷への思い。そして、我が子への思い。そんな熱い思いにふれた役員さんたちは、これまでのやり方を変更することに決意したと言います。

ところが大変なのはそこからでした。今までのやり方を「変える」ということは、とてつもなく大きなエネルギーを要します。今まで通りを踏襲していれば、余計な手間はかかりません。「変える」ことに抵抗感を持った大きな勢力は、「T」だったようです。ア然とし

ました。その圧力は私や子ども塾にも押し寄せました。それでもその一つ一つを跳ね除け、または調整し、ありとあらゆる工夫を総動員して、この会の実現に奔走したのです。中学生集会や子ども塾文化祭にも視察に来られました。「この人たちは本気だな」と思いました。そしてようやく、本当にようやく、この日を迎えるに至ったのです。

語られる胸のうち

当日の天候は嵐。暗雲に晴れ間がのぞくという荒天でした。集まったのは六〇人くらいだったでしょうか。我が子を連れて来られていた「P」が、その胸のうちを語ります。

「ちょうど二〇〇二年頃に私は中学生で、…自身が学び感じてきた人権学習について語りはじめます。後ろ向きだった中学時代。大人になっていく過程のなかで差別について語り合った経験。そして自分を語る機会の大切さを、笑顔でおられました。

「お話を最初うかがってドキドキしているんですけど、私自身は部落の出身で、小中学校で人権教育とか地区学習会に参加して教えてもらってきて、…こう語る保護者は、自身が経験してきたプラスの思い出もマイナスの思い出も披歴してくださいました。いづれも、人とのつながりのなかで、今の自分があると明かしてくださいました。

「応答」すること

子ども塾のメンバーが、そんな大人の発言に応えます。それは、「本音には本音で」といった、ごくごく当たり前の自然な行為であり、そこに大人と子どもといった立場は関係ないことを示してくれました。それは原田彰が、かつての板野中学校で起こっていた出来事を分析し著した、「差別・被差別を超える人権教育」(明石書店)で言うところの、「応答」でないかと思うのです。それはあるようで、実はあまりなかったりします。しかし私たちが本当に大切にしていたのは、そういうことだと思うのです。

それに応えて思いがけず、「孫がお世話になっております」と、我が校の生徒の祖母だという方が発言されました。自殺防止のための電話相談に取り組んでいることにおかれて、「人が誰かに話すことはすごく大事だと思います」というお言葉をいただきました。

また、たった一人で来場したというある中学生は、前週にあった遠足で、不登校の特別支援生と一緒にまわったことについて話します。「一緒にまわってくれてとても楽しい一日にできました。ありがとう」帰りのバスでそう言ってくれたことの喜びを述べ、友達を大切にすることの大切さを、その子からあらためて気づかされと語りました。

ホンモノの出会い

この会が次年度以降、どうなっていくのかは分かりません。それ

でも、たとえ少数であったとしても、深く強い思いをもった「P」はいて、不安を感じながらも、ホンモノのつながりを求めている人がいることはよく分かりました。後に塾生が、その日の思いを寄せてくれました。

「私は今回、部落差別のことが特に記憶に残っています。『最近部落差別・同問題を学校で習わない』と言っていました。確かに小学校でこの問題について習った記憶はあまりありません。また部落出身だからという理由で、交際している人と離れなくてはならないのは、とてもつらいことだと思いました。私は恋愛というものをしたことがないので、好きな人と別れなくてはいけないつらさ、しんどさがどれだけのものかを完全に計り知ることはできませんが、でも人権学習をしなかったら、人間の感情や欲求について深く考えることはなかったと思います。これからも、『自分を語る』ことを続けていきたいです。」

本当は大人や「P」にこういう場が必要であり、子どもたちの純粹で真っ直ぐな思いにふれて、癒され、かつての思いを取り戻していくのではないかと思います。だからこういう場は必要なのです。

秋の3大イベントを終え、塾生は大きく成長しました。人との出会いや様々な舞台が成長させてくれたのだと思います。これが読まれる頃はちょうど閉講式。そんな子ども塾の様子は、ホームページからどうぞ。